

2010年度日本社会文学会秋季大会・第32回原爆文学研究会例会

原爆体験と表象／文学 過去からの呼びかけ、未来への語りなおし

日程 2010年10月2、3日(土、日)

会場 広島大学東広島キャンパス 学士会館2階レセプションホール

〒739-0046 東広島市鏡山一丁目2番2号

JR山陽本線「西条駅」からバス「広島大学」行、「広大中央口」下車(約15分)

山陽新幹線「東広島駅」からタクシー(約15分)

10月2日 12:20 受付開始(10:50 オープニングイベント受付開始)

11:00～11:50 オープニングイベント 松川真澄 劇的朗読会「慟哭 広島、あい」(*学士会館2階ラウンジ)

12:40～12:50 閉会挨拶 長野秀樹(原爆文学研究会世話人/長崎純心大学)

12:50～13:40 研究発表「女性と沈黙 林京子を中心に」 姜東星(城西国際大学)

コメント 野坂昭雄(大分県立芸術文化短期大学)

13:40～14:30 研究発表「小説カルポルタージュカ 核時代の表象と大江健三郎」

山本昭宏(京都大学大学院)

コメント 島村輝(フェリス学院大学)

14:30～14:50 コーヒーブレイク

14:50～15:40 研究発表「核時代における人間の崩壊と歴史の再生 堀田善衛『審判』試論」

矢崎彰(聖路加看護大学)

コメント 高野吾朗(佐賀大学)

15:40～16:30 研究発表「主体のゆらぎ 大田洋子「山上」を中心に」

中野和典(佐世保工業高等専門学校)

コメント 山口直孝(二松学舎大学)

16:30～16:50 コーヒーブレイク

16:50～17:45 講演「肯定形としての原爆 占領期のいくつかの言説」 河西英通(広島大学)

18:00～20:00 懇親会(*学士会館1階レストラン「ラ・ボエーム」一般5000円 学生3000円)

10月3日 8:50 受付開始

シンポジウム「原爆表象／文学と政治的リアリズム」

9:10～9:20 趣旨説明

9:20～10:50 基調報告

「誰が「広島」を詠みうるか？」 松澤俊二(桃山学院大学)

「見なかった者が描く絵画 非目撃者による原爆の視覚的表象」 加治屋健司(広島市立大学)

「知的概観的な時代」の「表現行為」について

三島由紀夫を視座として「加害」と「被害」を考える」 柳瀬善治(静宜大学)

10:50～11:20 コーヒーブレイク

11:20～11:40 コメント 岩崎稔(東京外国語大学) 加納実紀代(敬和学園大学)

11:40～12:40 全体討議

司会 深津謙一郎(共立女子大学) 水川敬章(日本学術振興会特別研究員)

12:40～12:45 閉会挨拶 島村輝(日本社会文学会代表理事/フェリス学院大学)

主催 日本社会文学会 原爆文学研究会

連絡先 広島大学大学院教育学研究科国語文化教育学講座川口隆行研究室

〒739-0046 東広島市鏡山一丁目1番1号

082-424-7051

E-Mail koharu12@hiroshima-u.ac.jp

10月2日

オープニングイベント

松川真澄 劇的朗読会「慟哭 広島、あい」

朗読*大平数子「慟哭」、峠三吉「ととつたおかあさん」、松谷みよ子「まちんと」など

松川真澄プロフィール

劇的朗読家 / 女優 / 朗読サロン主宰。神奈川県鎌倉市生まれ。東京女子大学文理学部日本文学科卒業。新内節を鶴賀若狭掾（人間国宝）に師事。地歌舞を古澤侑峯（古澤流東家元）に師事。1998年チェリストの佐藤明氏と共におはなし宅急便を結成。各地で公演活動をする一方、【朗読サロン ことばのへや】を主宰。坪内逍遙、泉鏡花、北原白秋、芥川龍之介、宮沢賢治など近・現代文学の劇的朗読に定評がある。

民俗芸能を取り入れた一人語りミュージカル「レディー・マクベス」（シェイクスピア原作/平辰彦翻案・脚色・演出）では、マクベス夫人を東北弁で演じ、2002年より東北各地で連続上演。日本で上演されたシェイクスピア劇として高く評価され、日本シェイクスピア学会や日本演劇学会にてレクチャーパフォーマンス。「劇的朗読家」は、2005年、その独自の様式により特許庁より認可された商標登録。2006年、松川真澄ひとり舞台「『おりん口伝』伝」（ふじたあさや作・構成・演出）を「おりん口伝」の作者・松田解子の故郷である秋田県大仙市協和で初演、好評を博す。2007年、「紅天女」（美内すずえ作・世田谷文学館主催）で語り・紅天女役を演じ、「藪の中」（芥川龍之介作）などで、地歌舞と朗読を融合した舞台公演を行う。2008年、東京・シアターカイにおいて「『おりん口伝』伝」を再演。2008年度、文部科学省読書ボランティアリーダー養成講座講師。2009年、川崎市教育委員会より依頼され、特別非常勤講師（朗読）として1年間、川崎市立南河原小学校に出講。近年、洋画の吹き替え、方言指導、テレビCM / ドラマ等にも出演。2010年8月、東京・市ヶ谷において「慟哭」（大平数子作）をはじめとした広島の「原爆文学」による劇的朗読公演を行う。

研究発表要旨

女性と沈黙 林京子を中心に

姜東星

近代女性文学において少女時代を外地、旧植民地で過ごした女性作家の活躍が目立つ。林京子はその中の一人である。

日中戦争中の上海で林京子は十四年間を過ごした。一九四五年三月長崎に引き上げ、学徒動員の工場で被爆する。林京子は終戦三〇年後、被爆体験を綴った小説『祭りの場』を発表している。この三〇年間に亘る沈黙の意味は何だったのだろうか。

林は、恋愛、結婚、出産、育児という女性としての体験、日中戦争下の上海で育った体験、「八月九日」に関った死に向き合う日々の複雑な体験を内面化し、沈黙していたと考える。この沈黙を続けていたからこそ、占領地と被爆国、加害者と被害者、上海と長崎という両義性の矛盾は、長い沈黙後の彼女の自己語りの衝動を大きく孕んでいたといえる。

上記の視点から林京子の作品を分析し、近代女性文学における〈沈黙〉を追究する。

コメンテーター / 野坂昭雄

小説カルポルターージュが 核時代の表象と大江健三郎

山本昭宏

1960年代前半に発表された大江健三郎の小説群から、核時代の表象を見つけ出すことは容易である。被爆者とそれを取り巻く人々との関係が書かれた「日常生活の冒険」と「アトミックエイジの守護神」に加え、「個人的な体験」が即座に挙げられよう。また、大江は、芥川也寸志によるオペラ「暗い鏡」の台本（オペラは1960年放送初演）も手掛けている。

かつて成田龍一は、大江が被爆の記憶を表象するにあたって小説の形式を回避し、ルポルターージュを選択したと指摘した（「方法としての「記憶」」『文学』第6巻・第2号）。しかしそれを言うならば、まず問われるべきなのは、小説でもルポルターージュでも被爆を書こうとしていた大江の試みの内実ではなからうか。

本報告では、1960年代前半の小説とエッセイ、ルポルターージュにおける核時代の表象を通時的に分析し、核時代を書こうとした大江の試みを問い直したい。その作業を通して、被爆体験を持たない作家が小説において核時代を書くことの可能性と限界が垣間見えるはずである。

コメンテーター / 島村輝

核時代における人間の崩壊と歴史の再生 堀田善衛『審判』試論

矢崎彰

安保闘争前後に書かれた堀田善衛『審判』（単行本一九六三年刊）は、原爆投下の罪と戦場での殺人の罪とを対比させながら、戦争の傷を抱えて生きる人物を軸に展開する。広島原爆投下にかかわったポール・レポートを迎えた大学教授出音也の家では、中国戦線で老婆を殺した体験に悩み神経症を患う義弟高木恭助を家族の間でも半ば持て余していた。出家の人々がポールと交わることで、家族は既にバラバラになり、それぞれの内面も崩れていることがやがて明らかにされる。これは過去の戦争体験を清算できないまま、核時代の到来により人間の内面が崩壊していく戦後社会のあり様を象徴しているといえよう。そして未来を切り開く方向で過去の歴史と向き合うことによってしか虚無と絶望から人間を救う道はないことが示される。

コメンテーター / 高野吾朗

主体のゆらぎ 大田洋子「山上」を中心に

中野和典

一九四七年冬、大田洋子は当時未発表だった「屍の街」（一九四八）について占領軍から取り調べを受けた。そのときの体験を題材にした小説「山上」（一九五三）に対しては、占領期に「原爆文学」が受けていた圧力を描き出した「メタ検閲小説」としての評価が小田切秀雄（一九五五）以降定着している。しかし、大田が「心理的な血へどを吐きつつ書いたと振り返る「山上」は、単に「屍の街」発表までの経緯を明かしただけの小説ではない。本発表では『「屍の街」（主）と「山上」（従）』という従来の配置をあえて『「山上」（主）と「屍の街」（従）』と反転する視点から見えてくる問題を追究する。具体的には「怯懦な笑みの反復や中国観の変容等について考察することによって、阿諛と告発の間にゆれる「私」の形象を分析し、それを手がかりに大田の主体のゆらぎについて考えたい。

コメンテーター / 山口直孝

講演要旨

肯定形としての 原爆 占領期のいくつかの言説

河西英通

占領期日本において 原爆 はどのように形象されていたのだろうか。GHQによる言論統制があったものの、原爆 はさまざまな方向から語られた。本報告ではいわば「肯定形」として用いられた 原爆 言説について、敗戦後の人口抑制（産児制限）の必要上、急激に販売促進された避妊薬の新聞広告の言説に注目することで、第一に、原爆 の圧倒的な科学性と絶対性が避妊薬の安全性と確実性をイメージしたこと、第二に、占領下に成立した優生保護法（のち母体保護法と改称）の「不良な子孫の出生を防止」という優生思想が、戦勝国の圧倒的なプレゼンスのもとで、広く受け止められていったこと、を明らかにしたい。またそれ以外の肯定形としての 原爆 言説についても紹介することで、占領期の 原爆 言説が示す戦争記憶の無慈悲性を考えてみたい。

10月3日

シンポジウム「原爆表象 / 文学と政治的リアリズム」

企画説明

過去に起きた出来事、その経験・体験に触れることは可能なのだろうか。哲学者・美術史家ジョルジュ・ディディ＝ユベルマンは、アウシュヴィッツの悲劇を表象不可能であるとする論客に対して、その経験・体験は表象可能だと厳しく論駁した。その正否は単純に見定められるものではないが、ひとまずユベルマンに寄り添うならば、文学や視覚表現のイメージ＝表象に真摯に向き合うことで、この神学的な問いに応答できよう。

原爆体験と表象 / 文学という設定において、この問いと深く関わるのが、被害と加害をめぐる議論である。原爆を戦争被害の象徴と見なしてその不当性を語れば、原爆を戦争加害の必然的な帰結と見なしてそれを正当化する反論を招く。早期終戦人命節約論、戦時復仇論、核抑止論といった政治的リアリズムに由来する原爆正当化論は根強いため、栗原貞子の詩「ヒロシマというとき」に端的に表れているように原爆表象 / 文学が置かれる文脈は常に闘争的にならざるをえない。政治的リアリズムは人々の経験・体験を演算可能な数値に変換し平板化するが、原爆表象 / 文学はそれとの対峙を避けられない。

さらに言えば、この被害 / 加害論は戦争責任という未決の問題とも不可分である。東京裁判、サンフランシスコ講和条約、高度経済成長といった流れの中で昭和天皇の免責、軍部への責任集中、アジアの軽視を一貫させてきたことが多くの日本人の責任意識を希薄化した。この点において戦争責任は「戦後」責任でもあるはずだが、その希薄さの由来もまた、政治的リアリズムのエコノミーの次元での思考に深く関わるであろう。

日本社会文学会と原爆文学研究会の共催というまたとない機会に恵まれた今大会のシンポジウムにおいて、原爆表象 / 文学を手がかりとして、政治的リアリズムとは別の現実性ある、望ましい社会を構想する力となる被害 / 加害論、戦争責任論の地平を獲得すべく、議論を構築したい。

（深津謙一郎 水川敬章）

報告要旨

誰が「広島」を詠みうるか？

松澤俊二

本発表が、最初に検討するのは、かつて昭和天皇裕仁が被爆地「広島」について詠んだという和歌と、その歌を刻んで市内に建立された「御製碑」である。報告では、それらは裕仁の戦争責任を免責する論理を体現するものとして提示されよう。また天皇の和歌表現自体がそうした論理を共犯的に下支えする様子もそこでは検討される。さらにそれらの問題は、原爆投下は「広島市民には気の毒だが仕方の無いこと」といった裕仁自身のリアリスティックな原爆観を問うことにも繋がってくるはずだ。

一方で、本発表ではかかる「政治的リアリズム」に抗する手段も短歌表現より見出したい。とりわけ被爆者の苦痛や、憤りを称えた生々しい歌々を基点に、それを個人の痛みから社会の痛みとして共有しうる可能性について考え、以て「御製」の「政治」に抗する術として提示できればと思う。

見なかった者が描く絵画 非目撃者による原爆の視覚的表象

加治屋健司

原爆の視覚的表象は、それを目撃した者だけでなく、目撃していない者によっても生み出されてきた。本発表は、非目撃者による原爆の視覚的表象の意味を検討する。非目撃者による視覚的表象は、しばしば、実際の様子を伝えていない二次的なものと考えられてきた。しかし、視覚的表象とは、元来視覚的「再現」であり、目撃者によるものであっても、媒介性を免れることはできない。それに加えて、時の経過とともに非目撃者による表現が増加することを知る必要がある。本発表は、丸木位里・赤松俊子、鶴岡政男、山下菊二等の絵画から、その後の視覚文化の表現まで、非目撃者による原爆の視覚的表象の歴史を検討することによって、媒介的表現がもつ意味を考察する。最後に、直接の被害者でない者による視覚的表象の視点から、直接の加害者でない者の戦争責任について考えを進めたい。

「知的概観的な時代」の「表現行為」について

三島由紀夫を視座として「加害」と「被害」を考える

柳瀬善治

晩年の三島由紀夫は様々な政治的文脈の発言を行っているが、そこには「加害」と「被害」をめぐる興味深い視座が含まれている。『文化防衛論』では「世界的に被害者と加害者の逆転」が起こっていると見え、講演やいくつかの対談ではそれを核抑止力や運動の戦術へとつながる象徴的にしか機能しない「表現行為」の問題へと結び付けている。三島は当時のメディア環境も含めた社会構造の変化やそれに連動した実践の変動を彼なりの仕方的感受し、それに対応しようとしていたのだと言える。こうした三島の対処法を、三島の小説におけるさまざまな表象の実験とも重ね合わせ、さらには他の作家や批評家の動向もにらみながら考察し、現在の政治的な表象の思索へとつなげる糸口としたい。

ディスカッション 岩崎稔（哲学・政治思想史） 加納実紀代（歴史学・ジェンダー研究）